

國學院大學學術情報リポジトリ

保育表現技術の自己教育プログラム構築：
絵本の読み聞かせの技能向上を目指して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉永, 安里, 結城, 孝治, 山瀬, 範子, 廣井, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001295

〔研究ノート〕

保育表現技術の自己教育プログラム構築

— 絵本の読み聞かせの技能向上を目指して —

吉永 安里 結城 孝治 山瀬 範子 廣井 雄一

【要旨】

本稿の目的は、保育者養成課程において学生に保育表現技術を習得させるにあたり、学生自身が主体的に自らの実践を改善していくことのできる自己教育プログラムを開発することである。保育表現技術の中でも学生がボランティアやインターンシップ、実習等で行う機会の多い絵本の読み聞かせの技能向上に焦点化し、知識・技能と実践とを往還的に学ばせることのできる、自己評価を取り入れた学習プロセスの構築を図った。また、本プログラム内で使用する、初学者である学生に適した教材の選定や自己評価の際の評価基準の設定も行った。評価基準としては、①聞きやすさの演出（声の大きさ、読む速さ、発声、声色、声の抑揚、絵本の表現方法の解釈の6項目）、②見えやすさの演出（子どもからの見やすさ、ページのめくり方の2項目）、③相互作用（表情、視線の向け方の2項目）の10項目を設定し、各項目について5段階評価させる評価シートも作成した。

【キーワード】

自己教育力 読み聞かせ 保育表現技術 自己評価 相互作用

1. 研究の目的

本稿の目的は、保育者養成課程において学生に保育表現技術を習得させるにあたり、学生自身が主体的に自らの実践を改善していくことのできる自己教育プログラムを開発することである。本稿では、プログラムの開発に焦点を当て、どのような内容をどのような方法で行うか、またどのような教材を選定するかを検討する。

現在日本の大学教育においては、「グローバルな知識基盤社会や学習社会において、学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培うことが重視されつつある」(中央教育審議会、2008)。また、大学教育に限らず、教員の資質能力としても「教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力」(中央教育審議会、2012)が求められている。

このような自ら学び続ける力は「自己教育力」と呼ばれ、これまでも多くの領域において研究されてきた古くて新しい概念である。自己教育力は、「世界的にみれば、ソクラテス、ルソー、

ペスタロッチなどにさかのぼってみることができる。しかし、近年のわが国における「自己教育力」論は、ラングラン（P. Lengrand）の「生涯教育（lifelong education）」論（1965年12月、パリで開かれた第3回ユネスコ成人教育推進国際委員会で提案）に端を発している」（竹長、2001）と定義される。学校教育段階で学ばれる知識・技能だけでは時々刻々と情報更新されていく知識基盤社会に対応することが困難な昨今、自己教育力は学校教育の場において、また卒業後も、特に自己研鑽が求められる専門職において、身につけることが求められる能力である。

専門職において求められる自己教育力を身につけるための大学生を対象にした研究は、これまでも「看護教育の領域において数多く、看護学生を対象として調査検討されて」（長谷部、2009）きた。しかし、保育者養成課程の学生を対象としたものは、まだその端緒についたばかりである（西浦ら、2005；長谷部、2009；久、2011；永田、2013）。

では、保育者養成課程においては、どのように自己教育力を高めていけばよいだろうか。このことに関して、社団法人保育士養成協議会（2008）は、「成長し続ける」保育者は、獲得された知識を保育現場での子どもの姿と参照し、実践に生かす、そしてその実践の中で学ばれたことを再び知識とし保育現場で参照していく往還的關係の枠組みを学ぶことが重要であるとしている。同様に、このことは、中央教育審議会答申（2012）においても、「教科や教職に関する高度な専門的知識や、新たな学びを展開できる実践的指導力を育成するためには、教科や教職についての基礎・基本を踏まえた理論と実践の往還による教員養成の高度化が必要である」と述べられている。つまり、保育者養成課程において、保育に関する基礎・基本の知識・技能である理論を学び、それを実践し、実践したことをさらにより高度な知識・技能に還元していくという、理論と実践を往還するその枠組みを学ぶことで、将来に渡り自主的に学び続け、成長し続ける保育者を養成することが肝要である。

2. 自己教育プログラムの構築

2-1 学習内容

保育者が身につけるべき基礎・基本の知識・技能にはどのようなものが考えられるであろうか。保育者には発達に関する知識と発達援助の技能、子どもの生活・福祉に関する知識と援助の技能、環境に関する知識と環境を構成する技能、遊びを豊かに展開していく知識・技能、子どもや保護者の気持ちに寄りそう関係構築の技能など、多岐にわたる知識・技能が挙げられる。しかも、このような保育に関する知識・技能は、保育現場での蓄積された「技」として伝授されていく側面が強く、保育者養成課程においても、学生たちに体系的な知識・技能といった理論を伝達すると共に、保育現場の中でそれを子どもの姿と参照・理解し、どう実践の中に生かすことができるのか、理論と実践の往還的關係の中で学ばせていく必要があると考えた。

そこで、本プログラムでは、往還的学びの枠組みを学習する上で、まず理論としてどのような知識・技能を取り扱うか、学習内容を検討した。本プログラムは、保育の初学者である学生を対

象にしたものであるため、保育に関する知識・技能が少ない学生のうちから比較的習得しやすく、保育現場で行われる機会の多い習得の必要感が感じられやすい、そして養成校内でも独立して場面設定が可能なものであるという必要条件に照らし、絵本の読み聞かせの保育表現技術を取り扱うこととした。絵本の読み聞かせは、「保育者にとって不可欠であり、(中略)保育現場にでてから、周囲の保育者からのアドバイスや保育者自身の研鑽にゆだねられている傾向にある。だが、読み聞かせの技術は、経験によって向上するものであるとともに、比較的短い期間に、ある程度まで上達可能な技術」(西川、2002)である。また、絵本の読み聞かせは、特に日常の保育で頻繁に観察される保育表現技術の一つでもある。保育所実習を経た学生への調査でも、94%の園で絵本の読み聞かせが日常の保育に取り入れていた（取り入れていない園3%、未記入3%）ことが明らかになっている（吉田・藤田、2007）。そして、絵本の読み聞かせは、お昼寝の前（吉田・藤田、2007）や昼食前後・降園前に、ほとんどの保育所や幼稚園で取り入れられている活動であり（廣澤、2012）、しかも、ボランティア等で学生が読み聞かせをするように依頼されることも多いため、大学入学後の比較的早い時期から学生にとって学びの必要性を感じやすい活動である。さらに、子ども主体の自由遊びや子ども同士の相互交渉とは独立して、保育者主体で行われる保育表現技術であるため、養成校内でも独立して場面設定を行うことが容易である。そこで、本自己教育プログラムでは、学習内容として絵本の読み聞かせを取り扱うこととした。

2-2 学習方法

2-2-1 自己評価

つづいて、往還的学びの枠組みを学習させるための学習方法を検討した。そもそも、理論と実践の往還には、理論を実践し、それを評価して再理論化し、再び実践に還元するという循環が必要であるため、評価のプロセスが欠かせない。この評価に関して、近年、保育の質評価や質の向上のために、様々な評価方法が開発されてきている。アメリカのHarmsらによって開発された保育環境や、保育者と子ども・子ども同士の関わりを評価できる保育環境評価スケール（Early Childhood Environmental Rating Scale：ECERS）とその改訂版（ECERS-R）、Piantaらによって開発された保育者と子どもの関わりを評価できる質尺度Classroom Assessment Scoring System（CLASS）、ベルギーのLaeversが作成した保育過程の質を捉えるChild Involvement Scale（CIS）などがその主なものとして挙げられる（秋田・佐川、2011）。こうした研究者など保育の当事者以外の他者評価による評価によって実践を評価し、その評価結果からよりよい保育のあり方を理論化し、再び実践に生かしていくといった方法が注目を浴びている一方、専門家による他者評価は、評価方法に精通した高い専門性をもつ第三者との連携が必要となり、どの園、保育者でも利用できるものではないという点がデメリットとして考えられる。

そこで、保育現場で日々活用でき、保育者の力量形成に資する評価方法として、自己評価の方法が模索され始めている。たとえば、岩立・諏訪・土方・金田・木下・斎藤（1997）は、保育と

子どもの発達の間係を明らかにするため「保育内容等の自己評価」のチェックリストを策定している。また、富田（2000）は、保育者の幼児に対する援助行動の自己評価によるチェックリストを作成し、これを用いることで保育者の援助行動に改善が見られたことを報告している。

では、自己評価は、絵本の読み聞かせという保育表現技術を向上させることを目的とする本自己教育プログラムにおいて、どのような意義があるのであろうか。

梶田（1997）は、自己教育とは「自己の責任と努力で、自分自身の自己としてのあり方を形成していくこと」であり、そのためには自分自身の活動を振り返り、反省する過程が重要であると述べている。また、このような自分自身の活動を振り返って吟味するためには自己評価が評価方法として有効であるとする（梶田、1994）。

そもそも自己評価とは、橋本（2003）によれば、「評価の対象となる者自身が評価の主体となって自分の現状を振り返り、何らかの方法でそれを記述する」評価方法である。自己評価は、他の評価方法に対して、自ら課題に取り組んでいるという自己決定感を高め、内発的動機づけを高めたり（西松・千原、1995）、評価のために設定された項目や視点に沿って自分のあり方を分析的に検討し、自己に対する肯定的意識や満足感を高めたりする（梶田、1994）といったよさがある。つまり、自己評価は、先述したように、理論と実践を往還させるのに役立つだけでなく、保育者が、内発的動機づけを高め、自分への肯定的意識や満足感を得ながら自主的に学び続けるための原動力としても活用できる評価方法であると言える。

現在保育者は、自己評価によって、自分自身の保育を自分なりに振り返り、常にその質を自ら改善していく理論と実践の往還的な学びがができる資質が求められている。当然、保育者を指す学生も、このような資質を十全とは言わないまでも身につけておく必要がある（岡本、2013）。つまり、保育者養成課程において、自己評価によって自らの資質向上を図ることのできる学生を育てることが、理論と実践の往還をしながら、自主的に学びつつける保育者を育成することにつながっていくと考えられる。そこで、学習方法として、一連の学習プロセスに自己評価を組み込むこととした。

2-2-2 ビデオ映像を用いた自己評価

しかし、ここで考えねばならないのが、本プログラムにおける自己評価の対象が、絵本の読み聞かせという保育表現技術であるという点である。作品のように自分自身の外側に表現され視覚的に捉えることのできる表現であれば、比較的自己評価もしやすいだろう。ところが、絵本の読み聞かせを自己評価するということは、言語的・身体的に表出された自らの保育行為を、聞き手側という外側の視点から捉え直し、さらに読み聞かせの対象者も含めた自らの保育行為に関わる状況そのものを俯瞰的に振り返るということである。つまり、読み手側の視点だけでなく聞き手側の視点、さらに読み手—聞き手を含めた状況そのものを俯瞰的に捉える視点の獲得が、絵本の読み聞かせと言う保育表現技術を自己評価する上で、重要なスキルとなると考えられる。

このようなスキルを習得する方法として、ビデオ映像を用いた自己評価方法が活用されるようになってきている。特に、保育の現場では、保育者の行為が、子どもとの相互作用によって展開していくため、ビデオ映像によって自らの行為を客観的、俯瞰的に捉えるために、このビデオによる評価方法が活用され、その有効性も検証されている。富田・田上（1999）は、幼稚園教諭が自らの保育行為のビデオ映像を継続的に視聴することで、援助行動の頻度・種類に大きな変化が生じたことを示唆している。また、澤井・駒井（2007）は、保育所保育士がビデオ映像を用いて保育内容を自己点検することで、子どもたちと接する際の視線の合わせ方、表情や姿勢等、自分自身の身体のあり方への気づきが促されたとしている。さらに、富田（2000）によれば、ビデオ評価法は、保育者の自己イメージに変化を生じさせ、高すぎる自己イメージをより現実的な自己に近い自己イメージへ移行させると指摘している。

以上のことから、本プログラムにおいては、絵本の読み聞かせと言う保育表現技術の特性に沿って、ビデオ映像を用いた自己評価方法を取り入れることとする。

3. 自己教育プログラムの実際

3-1 学習プロセス

鹿毛（2006）は、学習者が主体的に学習に取り組み自己評価活動を展開し、自ら学習する力を育成することの重要性を述べている。また、ビデオ映像を用いた自己評価の効果については、及川（2013）においても、大学の英語の授業においてコミュニケーション場面のビデオ映像を視聴し、振り返ることで、話し方の抑揚や発音において自身の長所や短所への気づきが促されたと、その効果が報告されている。これまで述べてきたこととも重ね合わせると、保育者養成課程においても、ビデオ映像を用いた自己評価が、自らの行為に対する学びを促し、主体的に学ぶ力に生きるのではないかと考えられる。

そこで、本プログラムでは、2で述べた学習内容と学習方法を取り入れ、絵本の読み聞かせに対する自己評価とビデオ映像を用いた省察を、学習プロセスに組み込むこととした。具体的には、まず学生が読み聞かせをし、その読み聞かせに対する自己評価をした後、自身の読み聞かせのビデオ映像を自己評価を参照しながら省察し、次の読み聞かせにつなげるという学習プロセスである。

3-2 評価基準の設定

本プログラムでは学習プロセスにおいて保育表現技術の自己評価を行うため、自身の行為を参照する評価基準を設ける必要がある。この評価基準の設計に当たっては、まず、絵本の読み聞かせにおいてどのような保育表現技術が求められているかを明らかにした。

読み聞かせにおいて、西川（2002）は、「発声や発音などの朗読技術を修得し、聞く側にたつ視点を学ぶこと」が重要であると述べている。このことから、聞く側の視点を意識させるための

年 月 日

絵本の読み聞かせ 評価シート

自分、もしくは読み手の絵本の読み方について、以下の質問1～10の項目、それぞれについて、全くそう思わない から 非常にそう思う までの5段階で評価し、記入例にそって当てはまる番号に○を付けてください。

	全くそう 思わない	あまり そう 思わない	どちら とも 思わ ない	やや そう 思 う	非 常 に そ う 思 う
記入例 子どもが聞き取りやすい声の大き気で読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問1 子どもが聞き取りやすい声の大き気で読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問2 子どもが聞き取りやすい速気で読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問3 子どもに聞き取りやすいはっきりした声で読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問4 場面によって声の調子(声色)を変えて工夫して読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問5 場面によって抑揚をつけて工夫して読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問6 行間や文・文字のスタイルなど、絵本の表現方法に合わせて読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問7 子どもが見えやすいように絵本を持って読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問8 子どもが見えやすいようにページをめくって読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問9 顔や視線を子どもに向けて読んでいたと思う 1	2	3	4	5
質問10 表情豊かに読んでいたと思う 1	2	3	4	5
<p>〔記述欄〕 質問1～10に関して、読み手の読み方について、特に気になった点があれば、「質問○について、×××という点」という形で、箇条書きで記述して下さい。</p> <p>記述例) 質問 1 について、子どもたちが、ざわついているのに、声が小さかった という点</p>					

記入者名

被評価者名(自己評価の場合は「自分」と記入)

図 1 評価シート

①朗読技術としての聞きやすさ、そして②絵本という、聞くだけではない見るメディアとしての特性を生かす見えやすさ、の2観点を設定することとした。さらに、横山・秋田(2007)、齊木(2004)、奥山ら(2014)は、絵本の読み聞かせでは子どもとの相互作用が重要であると指摘しているが、学生の読み聞かせにおいては技術面に着目しやすいこと(廣澤、2012)が示されており、本プログラムでは、③相互作用に関しても評価をさせることとした。これにより、読み聞かせの際生じる、読み聞かせする側とされる側の相互作用についても学生の意識化を図れるようにした。

まず、①聞きやすさとしては、各種小学校国語科の教科書で音読・朗読の観点として取り上げられているものを基本に、「声の大きさ」、「読む速さ」、「明瞭さ」、「声色」、「抑揚」、「表現方法の解釈」の6項目(質問1～6)を設定した。また、②見えやすさとしては、集団への読み聞かせで課題となる「子どもからの見やすさ」、「ページのめくり方」の2項目(質問7、8)を設定した。さらに、相互作用に関しては、奥山ら(2014)が、絵本の読み聞かせの活動においては、保育者と子どもとの間に「視線」を用いた相互作用が行われ、奥山ら(2008)はその保育者の「視線」が幼児たちの絵本の想像世界の共有化を図る一つの手立てとなっていることを示している。また、並木(2012)も、保育者がお話に関する発話とともに、「視線」「読み方の工夫」、そして「表情・身振り」によって、登場人物の感情を代替し、登場人物の感情を幼児に伝え、絵本の臨場感をみんなで共有しようとする様子を観察している。そこで、③相互作用では、本プログラムの対象である学生にも実践可能と考えられる、言語的相互作用ではないが、読み手の想像世界の理解を表出し、聞き手との相互作用を生ずる「視線」と「表情」(質問9、10)の2項目を設定した。

以上をもとに、作成した評価シートが図1である。①聞きやすさの演出の6項目、②見えやすさの演出の2項目、③相互作用の2項目の計10項目を行動指標として文章化し、学生に「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5段階で自己評価させる形式とした。

3-3 教材

本プログラムで使用する教材としては、保育・教育実習やボランティア・インターンシップ、また現場において読み聞かせする可能性の高い絵本を選定することとした。選定基準は、①『幸せの絵本-大人も子どももハッピーにしてくれる絵本100選』(金柿秀幸、2004、ソフトバンククリエイティブ)、『松居直のすすめる50の絵本-大人のための絵本入門』(松居直、2008、教文館)など、絵本を紹介する多数の書籍に重複して掲載されている、②保育所や幼稚園において一般的に配架され、長期にわたり読み継がれている定番教材である、③読み聞かせ場面(対象者の人数・年齢、季節など)を選びにくい、ということである。

この基準に照らし、『ぐりとぐら』、『どうぞのいす』、『わたしのワンピース』、『ぞうくんのさんぽ』の4冊を、本プログラムの教材として選定した。教材用絵本4冊の書誌情報は表1の通りである。

表1 教材用絵本一覧

絵本名	作家・挿絵	対象年齢	出版社	出版年	ページ
『ぐりとぐら』	中川李枝子文 大村百合子絵	3歳～	福音館書店	1967年	28p
『どうぞのいす』	香山美子文 柿本幸造絵	3歳～	ひさかた チャイルド	1981年	32p
『わたしのワンピース』	にしまきかやこ文・絵	3歳～	こぐま社	1969年	44p
『ぞうくんのさんぽ』	なかのひろたか作・絵 なかのまさたかレタリング	2歳～	福音館書店	1977年	28p

4. 展望

本稿では、これまで行われてきた保育表現技術向上のためのプログラム開発や、評価方法の開発などの先行研究を踏まえ、知識・技能と実践の往還的な学びの枠組みを習得し、自ら学び続ける保育者を育成する観点から、「自己教育プログラム」の開発を行った。学習内容としては、学生がボランティアやインターンシップ、あるいは実習等で接する機会の多い絵本の読み聞かせを扱うこととした。また、自己の読み聞かせの技能を客観的・反省的に捉え、その向上を図ることを企図して、学習プロセスにビデオ映像を用いた自己評価を組み込んだ。本プログラムの実証的検討については、別稿「保育表現技術の習得における評価方法の影響－絵本の読み聞かせ技術を題材にした聞き手との相互作用への気づき－」（結城・吉永・山瀬・廣井、印刷中）にて論ずることとする。

さらに、本自己教育プログラムでは、学習内容として絵本の読み聞かせを扱ったが、他の保育表現技術についてもそれぞれの技能に適ったプログラム開発が必要であり、今後の検討課題としたい。

〔付記〕 本稿は、平成23年度 國學院大學人間開発学部学部共同研究費の助成を受けて行われた。

〔引用文献〕

- ・秋田喜代美・佐川早季子（2011）「保育の質に関する縦断研究の展望」東京大学大学院教育学研究科紀要51, pp.217-234.
- ・岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・齋藤政子（1997）「保育者の評価に基づく保育の質尺度」保育学研究35,pp.52-59.
- ・及川賢（2013）「ビデオカメラ映像を利用したフィードバック：英語力向上と授業力向上を目指して」埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 12 ,pp.111-117.
- ・岡本拓子（2013）「保育者養成校における力量形成としての表現活動」保育学研究51（3）, pp.165-169.
- ・奥山優佳・松述毅・香曾我部琢（2014）「クラス活動の絵本の読み聞かせにおける相互作用の意義:保育者と幼

- 児の視線の変容プロセスの分析より」 東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要 4, pp.73-82.
- 奥山優佳・香曾我部琢（2008）「想像世界の共有化を修辞する保育者の身体技法-クラス活動における絵本の読み聞かせの相互行為分析より」 東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要（39）, pp.41-47.
 - 鹿毛雅治（1990）「内発的動機づけに及ぼす評価主体と評価基準の効果」 教育心理学研究38, pp.428-437.
 - 梶田叡一（1997）「自己を育てる」 金子書房
 - 梶田叡一（1994）「教育における評価の理論Ⅰ」 金子書房
 - 齊木恭子（2004）「児童文化財を活用した保育実技の質的向上を考える」鳥取短期大学研究紀要50, pp.151-160.
 - 澤井洋子・駒井美智子（2007）「ビデオによる自己評価点検に関する研究-保育士のビデオ自己点検評価に関する報告」保育学研究45（2）, pp.111-121.
 - 社団法人保育士養成協議会（2008）『保育士養成資料集第48号保育士養成システムのパラダイム転換Ⅲ』
 - 竹長吉正（2001）「自己教育力」日本国語教育学会編『国語教育辞典』（pp.192）朝倉書店
 - 永田彰子（2013）「保育者・小学校教員養成課程の学生における自己教育力の形成に関連する要因の検討-ボランティア体験および実習との関連から-」安田女子大学紀要41, pp.251-262.
 - 中央教育審議会（2012）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm）
 - 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会（2008）「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm）
 - 富田久枝（2000）「幼稚園教員のビデオ自己評価研修とその効果」保育学研究38（2）, pp.185-192.
 - 富田久枝・田上不二夫（1999）「幼稚園教員の援助スキル変容に及ぼすビデオ自己評価の効果」教育心理学研究 47（1）, pp.97-106.
 - 並木真理子（2012）「幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響」 保育学研究50（2）, pp.165-179.
 - 西川宏子（2002）「保育学生における絵本の読み聞かせの理論及び方法の修得に関する研究-絵本を読み聞かせられる立場に立つ経験を取り入れることを通して-」中国学園紀1, pp.37-41.
 - 西浦和樹・松原 勝敏・中村 多見（2005）「保育者養成における社会的スキル及び自己教育力の育成に関する教育心理学的研究」宮城学院女子大学発達科学研究 5, 2005, pp.71-81.
 - 西松秀樹・千原孝司（1995）「教師による個人内評価と自己評価が内発的動機づけに及ぼす効果」 教育心理学研究43（4）, pp.436-444.
 - 橋本重治（2003）「教育評価法概説 2003年改訂版」 図書文化社
 - 長谷部比呂美（2009）「短期大学生の自己教育力に関する検討（2）-保育学生の自己教育力の推移-」 淑徳短期大学研究紀要49, pp.111-121.
 - 久洋子（2011）「実習における「自己課題」に関わる指導方法の探究（1）「自己教育力」育成の観点からのアプローチ」教育学論究（3）, pp.63-69. 関西学院大学教育学会
 - 廣澤満之（2012）「本の読み聞かせに対する学生の理解：教育実習を通じた学生の気づきに焦点をあてて」 目

白大学高等教育研究（18）, pp.9-16.

- 結城孝治・吉永安里・山瀬範子・廣井雄一（印刷中） 「保育表現技術の習得における評価方法の影響 -絵本の読み聞かせ技術を題材にした聞き手との相互作用への気づき-」 國學院大學紀要53, pp.1-21.
- 横山真貴子・秋田喜代美（2007） 「読み聞かせを構成する保育者の思考と行動（4） -読み聞かせはどのように熟達化するのか？：保育者養成専門学校の学生の視点」日本保育学会大会研究 論文集51, pp.548-549.
- 吉田博子・藤田圭子（2007） 「幼児教育における児童文化:実習保育所における児童文化の現状について」淑徳短期大学研究紀要46, pp.131-143.

（よしながあさと 國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）
（ゆうきたかはる 國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授）
（やませのりこ 國學院大學人間開発学部子ども支援学科専任講師）
（ひろいゆういち 國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）